

ぶろす

四季の会・ユーザーズ・サービス

341号

発行人 浅沼 邦夫

拝啓 梅雨の候、先生におかれましては益々御健勝のことと存じます。

「温故知新」は、とても有名な言葉です。「自分が以前に習ったことや、昔のことをしっかりと習熟して、新しいことを知ることができるならば、師（先生）となることができる」という言葉です。6/12の日経の「あすへの話題」の中で、「フレンチシェフ・三国清三さん」が、「温故知新」を感動的な素晴らしいことを書かれていました。

努力とは紙を重ねていくようなもの。一枚一枚は薄くても、何十年もたてば厚くなる。そう教えてくれたのは帝国ホテル元総料理長で、今は亡き村上信夫さんです。

自分の店を持つようになり今年で30年目になる。その間、いろいろあった。最もつらかったのはバブル崩壊とリーマン・ショックの時期である。景気はどん底状態で、高級店といわれた店が周囲でバタバタと音を立ててつぶれていったのです。

京都の料亭「瓢亭」のご主人に以前、店を持続させる秘訣を尋ねたことがある。瓢亭は創業以来、今日まで約400年の歴史を誇る。維持し続けるものと、時代に応じ変えていく必要があるもの。その2つのバランスをうまくとりながら、やってきた、と明かしてくれました。そこに浮かぶキーワードは「温故知新」です。

「道に迷ったら、引き返せ」とよく言われるが、肝心なのは戻る先があるかないか。それが長く続けられるかどうかのカギではないかと私は思う。単純なようで、意外にこれが難しいのです。

若いうちは8～9割が「知新」で、新しいことに挑むのもいい。だが、年齢を重ねるごとに「温故」の割合を増やす。そうすれば戻る先もできるのです。比率を変えながら常に「温故知新」を忘れずにいれば、多少のミスはしても、経営を揺るがすような決定的間違いは回避できるはずだ。温故

知新、実は「村上さんの座右の銘」でもあったのです。

仕事と人生は「ボート」を漕ぐようなもの

「仕事と人生はボートのようなもの」と言われます。ボートは、自分で漕いでいくのです。過去を押しやりながら、見えない背中の方に向かって進んでいくのです。私たちは、「仕事と人生という川をボートを漕ぐように」生きています。ボートは背中の方に向かって進んでいきます。通り過ぎた過去は見えますが、自分が今進んでいる未来は、背中の方なので見ることが出来ません。過去（経験）をオールでかきながら、見えない未来（目標）に向かって後ろ向きに進んでいるのです。川の流れ（時流）の中で、「勘と経験と度胸」を生かし、リスクを負いながら、目標に達成することが出来るのです。与えられた運命であり、仕事と人生であるのです。

今、まさに変化の時代、税理士にとって与えられた運命です。命と時間と財産をかけて、真剣に経営をしています。ボートに乗って一人でオールをかきながら進んでいるのです。「過去は過ぎ去り、未来は未だいたらざるなり、今をいきるのみ」。今の現在こそ大事で、最重要です。

問題のない会計事務所はない。顧客の問題、人の問題、資金繰りの問題など、経営に関するあらゆる問題が、気の休まる時がないのです。世の中の流れから、税理士はオールをかきながら、未来に向かって進んでいます。税理士はまさに大変です。

税理士は、所長先生としても、それぞれの立場で、役割で、起きてから寝るまで、休むことなく、働いている税理士もいるのです。更に、税理士は孤独です。しかし、「自分と未来」は変えられると思うと、想像力と共感が出てきます。「素直とプラス発想」で諸々のことを学んでいくことで、自分を変えていくのです。

会計事務所は、すべて人の問題です。自分の問題が会計事務所の問題であり、会計事務所の問題が自分の問題になるのです。そのくらい税理士は凄いです。頑張りましょう！

人は皆、天からその人だけの真実を授かってこの世に生まれてくる。天職という税理士かも知れません。その真実を發揮していくことこそ、すべての人に課せられる使命です。自分の花を咲かせるとは、天職を發揮して生きることに他ならないのです。

「温故知新」もその一つです。「温故知新」とは、日本独特な考え方かもしれません。長い歴史の中で、維持し続けるものと、時代の変化への対応のバランスを、うまく取りながら、日本人の仕事と人生の考え方であったのかと思うのです。

「ぶろす339号」で運鈍根のことを書きました。経営者は、「運は幸運、鈍は努力、根は根性」をもっているのです。成功者たちは、その道の達人なのです。

自分の花を咲かせる

昔、ある人にこういう話を聞いた。オリンピックの神々が集まり、「幸せになる秘訣をどこに隠したら、人間がそれを見つけた時にもっとも感謝するか」を話し合った。「高い山の上がいい」「いや、深い海の底だ」「それよりも地中深く埋めるのがいい」と議論百出。すると、一人の神が「人間の心の奥深いところに隠すのが一番だ」と言い、全員がその意見に賛成した、という話である。

幸せの秘訣は人間の心の奥深くにある。自分の花を咲かせる秘訣は心の中にある、ということである。だが、心の奥深く隠されているが故に、秘訣に気づかぬままに人生を終える人も少なくない。どうすればその秘訣に気づき、自分の花を咲かせることができるのか。

まず、自らの命に目覚めること。自分がここにいるのは両親がいたからであり、その両親にもそれぞれ両親があり、それが連鎖と続いて、いま自分はここにいる。どこかで組み合わせが変わっていたら、あるいは途絶えていたら、自分はここにいない。自分の命は自分のものではない。すべて与えられたものだ。その自覚こそ、自分の花を咲かせる土壌になる。

第2に大事なものは「一つ事」を見つけること。この一事をもって人生に立って行く。あるいはいま携わっている仕事をもって自分の一つ事にする。そう決意することである。

第3に大事なものは、その一つ事に本気になること。折りしも相田みつを美術館で「坂村真民と相田みつをの世界」展が開催されている。それぞれ独自の花を咲かせた二人に「本気」と題する詩がある。

「本気になる／世界が変わってくる／自分が変わってくる／変わってこなかったら／まだ本気になってない証拠だ／本気な恋／本気な仕事／ああ／人間一度／こいつを／つかまんとこには」－ 坂村真民

「なんでもいいからさ／本気でやっごらん／本気でやれば／たのしいから／本気でやれば／つかれないから／つかれても／つかれが／さわやかだから」－ 相田みつを

こういう言葉もある。「プロというのは寝ても覚めても仕事のことを考えている。生活すべてが仕事。そこがアマチュアとの絶対差だ」－ 相田みつを

「一に求道 二に求道 三に求道 四に求道 死ぬまで求道」－ 坂村真民
一道に命を懸けた人の凄まじい気迫が伝わってくる。この覚悟と実践なしに自分の花を咲かせることはできない、ということだろう。最後に、花を咲かせようとする者に天は力も与えるが、試練も与える。その時の心得。（致知2014.7号参照）

「風雪に耐えただけ 土の中に根が張るんだな」－ 相田みつを
「苦がその人を鍛えあげる 磨きあげる 本ものにする」－ 坂村真民